ようこそ盈進の読書科へ

読むことは「知る」こと
書くことは「考える」こと

盈進は「平和、ひと、環境」を大切にする中高一貫の学び舎です。豊かな言語力を身につけ、確かな論理観を養い、きらりと光る独創性に磨きをかけることを目指す「ひとづくり 3 教科」を学校教育の柱に据えることで、たくましく生きる力を育む教育を展開しています。中でも「読書科」はすべての学力の基盤となる「ことばの力」を培うオリジナル教科として特に中心的な役割を担います。

EISHIN GAKUEN

SPECIAL INTERVIEW

早稲田大学社会科学部へ進学
高2次 英検2級

後藤泉稀

2018 年度高校 3 年生
府中市立国府小学校出身

盈進が最も力を入れている「読むこと」「書くこと」への取り組みがどのように「未来を切り拓く力」となったか、今春盈進高校を卒業した後藤泉稀さんにインタビューしました。中高６年間の学びを通して何を得たのか、自分のことばで語ってくれました。

◆念願の早稲田大学合格おめでとう。いよいよ大学生だね。

ありがとうございます。盈進での６年間で、たくさんの人のお世話になりながらここまでやってこれたことに感謝の気持ちでいっぱいです。第一志望の早稲田大学に合格できたことはもちろん嬉しいですが、さらなる努力が必要だと今は身が引き締まる思いでいます。

◆大学ではどんなことを学びたいと思っているの？

私は「伝える」ということにとても興味があります。誰に何を「伝え」なければならないのか、そしてそれをどんな手段で「伝える」のか、どんなことばで「伝える」のかということに関心があるんです。将来はジャーナリストとして報道機関で働きたいという夢も持っています。これはクラブ活動の先輩で新聞記者をされている先輩への憧れの気持ちもあります。早稲田大学社会科学部は学びの自由さが整った環境にあるので、広い視野で社会問題に取り組めることを楽しみにしています。

◆夢への第一歩を踏み出せて本当に良かったね。今日は盈進生そして未来の盈進生のために、後藤さんが盈進で過ごしてきた６年間の歩みをいろいろ聞かせてね。まずは中学校時代から。

はい。私の中学時代は反抗期の真っ只中にあったように思います。母や学校の先生にも反発したりしてわがままもたくさん言いました。中学生の時に毎日その日あった出来事を書いていたＥノートを振り返ってみるとその時の私自身の気持ちがしっかり綴られています。文字の大きさや文字の形の変化もはっきりしていて中学時代の自分が手に取るように分かるんです。

◆Ｅノートは成長の証だよね。「書く」ということは苦ではなかった？

はい。担任の先生が書いてくれるコメントが嬉しくて毎日ちゃんと書き続けました。私は、書くことがとても好きだったんです。実は小学校時代に学校で「ことばの教育」を受けていて、問答ゲームや詩の暗唱、それから視写なども徹底的に鍛えて頂きました。中学年までには説明文や物語文の読み取りなど、基礎的な技術は身に付いていたように思います。高学年になると今度はいろいろな文章で「考える」実践を重ね、スピーチなどにも取り組んでいました。

◆書くことには自信があったんだね。

中学１年生の時にクラブで学んだことを生かした作文を書き、「第３３回全国中学生人権作文コンテスト」で法務大臣賞を頂いたことも大きな自信につながりました。中学２年生では英語が好きになって「グランドアテンダント」という夢を持つようになりました。実はそれまでは母の影響もあり「看護師」を夢みていたのですが、学習旅行で沖縄を訪れた際に空港という「場」に大きな憧れを感じたんです。この夢を英語でスピーチする校内のコンテストにも出場するなど、自分の思いを「書いて伝える」ことには積極的でした。

◆「読む・書く・伝える」ことに力を入れている盈進の読書の授業はどうだった？

正直、本を読むことは得意ではありませんでした。でも、中学１年生の時に読んだ『一房の葡萄』や『十五少年漂流記』などは心に残っています。中学２年生ではいろんな先生方から読書の授業をして頂きました。中でも『泣きみそ校長と弁当の日』を読んで、クラス全員が自分でお弁当を作ってくるという授業は面白かったです。オムライスを作って来た人がやたら多かったという（笑）。それから『１４歳からの仕事道』を読んで、自分の憧れの人に手紙を書くというのもありました。そのとき私の夢は「グランドアテンダント」から「医師」に変わっていて、沖縄の診療所の先生に手紙を書きました。看護師をしている母の知り合いの女医さんから『風に立つライオン』という本を頂いたことがきっかけでした。

◆多感な中学時代に読んだ本の価値は何物にも代えられない宝物だね。中学３年生の修了論文はどんなテーマで書いたの？

テーマは「ボランティア」でした。「医療」に興味があった背景には、病気や災害など困難な状況に置かれた人を精神的・物質的そして技術的に支えるにはどうすればいいのか考えていた自分がいます。修了論文を書くことはもちろん自分の興味関心があるテーマを熟考する大切な機会だったのですが、それ以上に印象的だったのは、周りの仲間たちがそれぞれに興味があるテーマを見つけてそれをすごく楽しそうに調べている姿でした。クラスメイトが意外にも「火山」に強い興味を持っていたり、友達が「童謡」について熱心に調べている姿は今でもよく覚えています。

◆高校に進学してからは？

卒業してみて言えることは、「６年間は長いけれど、高校３年間はあっという間」ということです。高校生になると否が応でも進学を意識しなければならなくなりました。前にも述べた憧れの新聞記者をしている先輩が慶應大学出身ということもあり、早慶をずっと意識していたのは事実です。高校１年生の時に初めて早稲田・慶應のキャンパスを見てその華やかさに魅了されました。そして先輩の影響もあり、夢も「ジャーナリズム」に固まってきたんです。

◆受験期はどうだった？

やはり１学期のうちは迷走していました。でも志望理由書を書いたり面接練習をしたりする中で、本当に自分のやりたいことがこの大学にあって、それが夢にもつながっているんだという実感が湧いてきたような気がします。だんだん自分が作られていくような感覚を覚えました。

◆これまで身に付けた「書く」力を使って小論文にも挑戦したよね。

はい。小中学校での基礎固めのおかげで「書くこと」への自信はありましたが、９月から始めた小論文のスタートは「書けない・ネタない」壁への直面から始まりました。今でもよく覚えているのは慶應の「来年１月１日から人類が鳥のように空を飛べるようになると仮定します。現在の法律および社会通念は人が空を自由に飛ぶことを前提としていないためさまざまな混乱が予想されます。解決策を述べなさい」という問題。もう…頭を抱えました…

◆大学入試にもさまざまな形式があるし、問われている内容も本当の意味での「思考力」が問われる傾向が強まってきている中で、どうやって乗り切ったの？

「自分はだめだ」と思う気持ちと「自分なら大丈夫、受かる」と思う気持ちが拮抗し、「自信」のコントロールをするのが最も大変でした。「不合格」という経験もしましたが、くよくよせずにいこうと思えたのは支えて下さった先生、先輩そして家族のおかげです。地方に住みながら首都圏の私大を受験するのはやはりハンデがあります。入試問題が手に入らなくて東京にいるクラブの先輩に大学まで足を運んでもらい入試問題を書き写してもらったこともありました。何度も何度も考えて書いて、直してまた書いての繰り返しを続けて、３校目の受験で小論文を書いたときやっと初めて「書けた」という手ごたえの実感が生まれ、合格を頂くことができました。

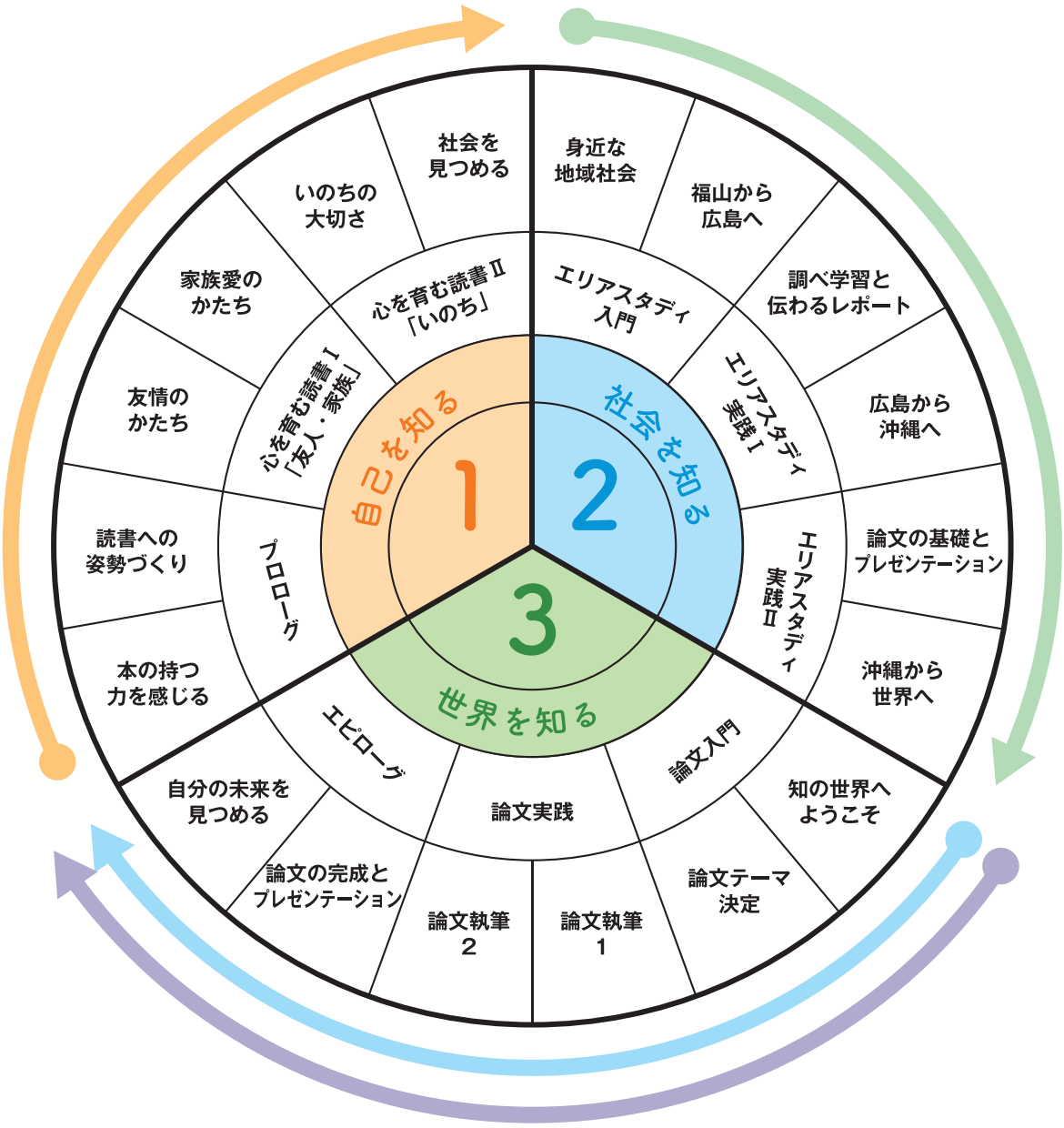
◆後輩たち、そして未来の盈進生にメッセージを！

私は府中に住んでいますが、中学校は福山にある盈進を選びました。盈進には本当にいろんな人がいて驚きました。自分にないものを持っている個性あふれる仲間と出会えたことで大きく世界が開けました。ここには自分の興味関心のあることを突き詰めるチャンスがたくさんあって、私の夢も小中高と変化を遂げていきながら今の「わたし」になったように思います。誰と出会うか、何に出会うか、出会いが人を変えます。盈進にぜひ来てみてください。きっと「伝わる」と思います。

◆今日はどうもありがとう！また盈進に帰って来てね！

読書科の学び ～本と出会い、ひとを知る～

読書科の授業には各学年に「学びのテーマ」が設けられています。週 1 回の授業で選定図書を年間 10 冊以上、3 年間で 30 冊読むことを目標にしています。3 年間の読書活動の中で、前半は仲間と本を読む一体感を味わいつつ、お互いの意見を交流することで、心を豊かに育みます。また後半は、私たちが生きる社会について知り、この世界で今起きていることを見つめ、各自が考える課題を解決します。「読み、書き、伝える」活動は盈進教育の根幹をなす学びの礎です。



読書科３年間の学びのテーマとカリキュラム

1年生のテーマ 自己を知る
personal

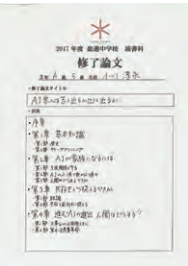
１年生のテーマは「自己を知る」。家族や友人とのつながりを通して心の成長を遂げる主人公の姿に、自分自身を重ね合わせて読みます。さまざまな愛情のかたち、友情のかたちに触れ「かけがえのない自分」に出会うとともに、自分を取り囲む人の存在にも気づくようになります。心を育みながら本が大好きになる１年間です。

2年生のテーマ 社会を知る
local

２年生は「自己」から「社会」へと視点を移し、読書活動の領域を拡げます。私たちの故郷「福山」そして「広島」について知り、「平和」というキーワードをさらに学習旅行で訪れる「沖縄」そして「世界」に結び付けます。「地域研究」×「平和学習」が生み出すドラマチックな読書活動を展開する学年です。

3年生のテーマ 世界を知る
national global

「自己」から「社会」へと視野を広げた２年間の学びを経て、３年生ではもっと広い「知の世界」での学びを体験します。自分の興味・関心のある分野からテーマを設定し、4000 字以上の文章をまとめる修了論文は中学校３年間の読書活動の集大成となります。



修了論文 ～書くことは考えること～

興味・関心に基づいたテーマを自ら設定し、４０００字以上の本格的な論文に挑戦。専門的な本を読み、自ら調べ、担当の先生の指導を受けながら半年以上かけて論文を書き上げます。主体的な学びを通して思考力を鍛えることで「21 世紀型能力」の礎を築くとともに、自分のやりたいこと、なりたい姿を思い描くことができます。

2017 年度修了論文テーマ
「レゴの世界から見る知育」
「外来種問題の背景と現状」
「色彩がスポーツ競技に及ぼす効果」
「チョコレートの栄養と機能」
「小学校での英語教育早期化について」
「女性疾患と日本のこれから」など

1年生

2年生

２年生では沖縄についての調べ学習をおこなうため、この他にも沖縄に関する本を多数使用します。

3年生

３年生では各自の選んだテーマに基づいて「修了論文」に取り組むため、使用する本も１人ひとり異なります。
学校図書館、公共図書館の所蔵する本を自分で見つけることから始めます。

EISHIN LIBRARY

読書の授業はクラス全員で１人１冊、共通の本を読む「集団読書」のスタイル。
週１回の授業で上にあるような選定図書を年間 10 冊以上、３年間で 30 冊以上読むことを目標にしています。３年間の読書活動において前半は、仲間と本を読む一体感を味わいつつ、お互いの意見を交流することで心を豊かに育みます。また後半は、私たちが生きる社会について知り、この世界で今起きていることを見つめ、各自が考える課題を解決します。「読み、書き、伝える」活動の中から、自分の生き方を見つめる教科です。

広島のお好み焼きの歴史を学び、
レポート作成。学びのまとめは
広島お好み広場にて

自分の書いた修了論文を、
パフォーマンスを交えて
プレゼンテーション

世界のＴＯＹＯＴＡ
トヨタ自動車のプリウス開発者
豊島浩二さんが来校！

カルビー（株）の会長兼 CEO の
松本晃さんがポテトチップスを
たくさん持って来校して下さいました！

読書科プレゼンツ
『ハブテトルハブテトランをめぐる旅』
～松永・尾道ＦＷ～
物語の舞台を実際に歩きました

広島を舞台にした作品
『赤ヘル 1975』を読んで、
全国の図書館に「読書郵便」
という形でＰＲ活動を展開。
全国からたくさんのお返事を頂き感動！

私たちの街「福山」再発見。
「盈進坂の桜」が
「福の山百選」リストに
ありました！

最初の授業で
「読書科特製しおり」
を作ります

本の作者に手紙を書いたり、
実際にお会いしたり…
読書を通じて、さまざまな
出会いも生まれます。

EISHIN DREAM PROJECT

盈進の建学の精神は「実学の体得」。社会に貢献できる人が持つ本当のにんげん力を身に付けるために「読書科」が創設され、四半世紀を経ました。そこで、こうした教育理念を大切にしつつ、「読書科」が主体となって「未来を見つめる 15 歳」を育成するため、「ドリームプロジェクト」を立ち上げました。

「ドリームプロジェクト」では、生徒たちの読書活動をさらに充実させるため、読書科行事や講演会を企画、また読書環境の整備をおこないます。生徒たちの夢の実現を後押しする、盈進の「読書科」。ワクワク・ドキドキがいっぱい詰まった学びを一緒に体験しませんか？

読むこと、書くこと、伝えること

中学生の活躍

盈進読書科で培った力を発揮してチャレンジした結果を一部ご紹介します！

（2017 年度、2018 年度）

第 17 回　木下夕爾賞　中学生の部

優秀　若林玄壮（福山市立道上小学校出身）

「赤色の自転車」　若林玄壮

赤色の自転車
それはいつもぼくのそばにあった

友達の家へ行く時も
おつかいへ行く時も

いつもいっしょにいた
赤色の自転車

パンクしても
何度も修理して使った

ぼくが使わなくなっても
妹が使った

ある日の朝
ぼくが起きると
お母さんに
「あの自転車もう使わんけー捨てるよ」
ぼくは
「いやだ」
と言ったがお母さんには伝わらなかった

ゴミステーションにもっていく時
ぼくはゆっくりと歩いた
そしてゆっくりゴミステーションの横にたてかけた

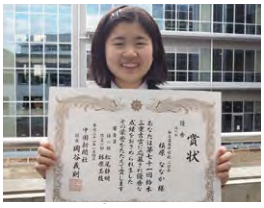
次の日そのゴミステーションを見ると
赤色の自転車はもう、なかった

ぼくは家の自転車置き場が
少し寂しく感じた

第 71 回　鈴木三重吉賞

優秀賞　槙原ななか　（福山市立湯田小学校出身）

「バレンタインデー」（以下中国新聞 2019 年 1 月 18 日付）



詩の部　松尾静明選

バレンタインデー

福山市・盈進中２年
槙原　ななか

私はチョコレート
スーパーの店先に置かれています
ある日女の子が私を買いました
目が覚めると私の形が変わっています
どうやら溶かされたようです
女の子は私を溶かすと型に流し込みました
そして私は冷蔵庫へ
また眠ってしまったようです
目を覚ますとビスケットがくっついています
彼女は難しい顔をしながら
私にお化粧をしています
ココアパウダーの良いかおりが広がります
どうやら新しい私が完成したようです
彼女は可愛い袋にそっと私を入れました
そしてていねいにリボンで包みました

今度は笑顔で何かを書いています
誰へのメッセージでしょうか
私をかばんに入れると彼女は家を出ました
私はいろいろな人の元へ届けられました
男の子にも、女の子にも
彼女の手から離れるとき
ほんのちょっぴり
彼女の気持ちが分かる気がしました
どうかこの気持ちが伝わりますように
私は今
彼女の大切な人たちの手の中にあります
私は忘れません
彼女の気持ちを、そして
私を受け取った人たちのとびきりの笑顔を
今日はバレンタインデー

広島修道大学
2017 作文コンテスト

最優秀賞　宮永　心（井原市立出部小学校出身）
優秀賞　岩藤奨弥（福山市立福相小学校出身）
　　西永倫菜（福山市立戸手小学校出身）
佳作　金田いつき（福山市立御幸小学校出身）
　　金尾陽飛（福山市立湯田小学校出身）

広島修道大学
2018 作文コンテスト

優秀賞　池田暁彦（福山市立幕山小学校出身）
佳作　酒見知花（福山市立湯田小学校出身）

赤い鳥　創刊 100 周年記念
感想文コンクール

佳作　羽原亜胡（福山市立蔵王小学校出身）

第１８回　みんなの新聞コンクール
新聞感想文の部

入賞　内海茉奈花　（福山市立加茂小学校出身）
　　高橋　瑠衣　（府中市立国府小学校出身）
佳作　土屋　颯磨　（福山市立蔵王小学校出身）
　　土肥　優花　（ぎんがの郷小学校出身）
　　長井　悠悟　（福山市立駅家東小学校出身）
　　平島　知紘　（福山市立桜丘小学校出身）

広島修道大学 2017 作文コンテスト

最優秀賞「２つの子守唄がくれた夢」宮永心

「眠れ、眠れ、母の胸に」ーー私が幼かった頃、眠る時にはいつも母がこの子守唄を歌ってくれていました。その歌を聞きながら布団の中にいるととても心地よかった記憶があります。

歌や音楽が身近にある環境で育ったせいでしょうか、私は音楽が大好きです。小学五年生から続けている琴の演奏もそうですし、中学生となった今は吹奏楽部でトランペットを担当し、みんなで音楽を作り出す楽しみも覚えました。

そんな私が、ある日母が歌ってくれていた子守唄が「シューベルトの子守唄」だと知る機会がありました。日本語の歌詞だったので、てっきり日本の子守唄だと思い込んでいた私は驚きました。調べてみると、1816年にドイツで作曲されたのち、1900 年代に内藤濯さんによって日本語に訳詞されて日本でも広まったようです。内藤濯さんと言えばあの『星の王子さま』の翻訳でも有名な方で、さらに驚きました。

この曲はドイツで作られてから何十年も経って日本語だけでなく沢山の言語に訳詞され、世界中の子どもたちに歌い聞かせ続けられていることを知って感動しました。同じようにモーツァルトの子守唄や、ブラームスの子守唄なども訳詞されて、今でも歌われています。いい音楽は国境だって言語の壁だって超えていけるのだと改めて感じることができました。

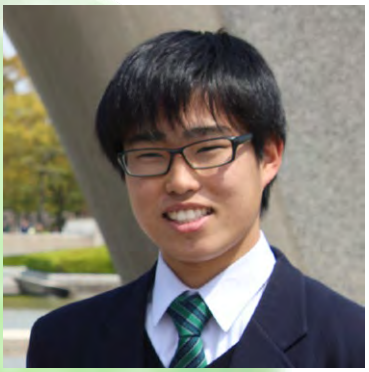
私の住んでいる街、岡山県井原市は、中国地方の子守唄発祥の地と言われています。市内には子守唄にちなんだ彫刻やモニュメントもたくさん存在します。「ねんねこしゃしゃりまーせ」で始まるこの子守唄は、井原市出身の声楽家上野耐之さんが恩師の山田耕筰先生に披露したのがきっかけで発表されることになった作品です。井原市は市民会館にある時計塔から毎日夕方五時にこの子守唄をミュージックチャイムとして流しており、地元の子どもたちはみんなこの子守唄を聞いて家に帰るのです。この曲を毎日のように聞いて育ってきた私にとっては、母の歌ってくれたシューベルトの子守唄と並んで、思い出深い一曲です。

私は、海外の子守唄が日本の子どもたちを眠りに導くように、私が慣れ親しんできたこの日本の子守唄が世界のどこかで訳詞され、子どもたちに歌われる日が来るといいなぁと思っています。母が子を思う気持ちは世界共通であり、子守唄の文化はこれからも永遠に続くと思うからです。

私は将来小児科もしくは産婦人科の医者になって子どもたちの成長に関わる仕事をしたいと思っています。そしてもしこの夢が叶えば、音楽の楽しさや音楽の持つ力を生かした医療活動を行いたいと考えています。それが子守唄の町で日本と世界と二つの子守唄に育てられた今の私の夢です。

私の盈進読書科　～卒業生の声～

「他者と共に生きる」社会の実現をめざす土台に



私が印象に残っている一冊は、中学 1 年生で読んだ佐野洋子さんの『100 万回生きたねこ』です。中学の授業の教材として、絵本を使うのは新鮮で、刺激的で、とても「楽しい」時間でした。あまり身近ではない「死」というテーマに対して、絵本で、仲間と一緒に考えることができたのは自分にとって貴重な機会でした。高校３年になった今振り返ると、あの「楽しい」は、短い単純な話の中に隠されているメッセージをみんなで探し、掴んでいく過程が楽しかったのだと思います。仲間と感想を共有することで、人によって受け取り方が違うということも強く感じています。特にこの本は内容が深いため、読み手の感じ方の差も大きかったのが印象に残っています。このように仲間と感想の共有ができるのも、読書科の授業の強みだと思います。

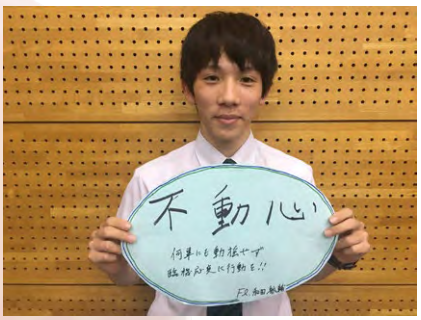
2018 年度 高校 3 年生
池田風雅（府中市立府中小学校出身）
広島大学 総合科学部へ進学
高１次　英検２級

大学生になるとよりわかる「読書科」の価値

私の本好きは盈進オリジナルの「読書科」で育まれました。中学時代から多くのジャンルの本に出合い、新聞を読むのも習慣化しました。論説やコラムが好きで、それらが知識や思考、表現力を豊かにしてくれたのだと思います。「読む力」は「書く力」――授業を通して、読むことが楽しく、書くことがさらに楽しく感じるようになりました。大学では、課されるレポート一つで成績が決まることがあります。主観的で自分の経験を述べるだけの文章は評価の対象にすらなりません。大学生になった今、改めて「読書科」の価値を感じています。

２０１８年春　卒業
髙橋　和（福山市立御幸小学校出身）
立命館大学 文学部に在籍中
高２次　英検２級

本で学び、ほんものを見つめる力に



中学２年生の時に、学習旅行で訪れる沖縄についての本をたくさん読んだことが印象に残っています。それまでは観光地としてのイメージしかありませんでしたが、琉球王国の歴史や、民俗・風習、太平洋戦争での沖縄戦について深く学び、沖縄の人々の「心」、そして「平和」とは何かを考える機会を与えてくれたのが読書科でした。クラス全員で同じ本を読んだ体験は、クラス全員でその土地を訪れ自分の目と耳で感じた学習旅行の感動の原点です。本で学び、ほんものを見つめる――この力は実社会でさらに生かされる力になると実感しています。

２０１８年春　卒業
和田航輔　（福山市立道上小学校出身）
岡山大学 工学部に在籍中

「書くこと」は、「話す」「伝える」力に

私は中学 1 年生で読んだ「一房の葡萄」がとても印象に残っています。友人の「絵の具」が羨ましくて、それを衝動的に盗んだ主人公が、仲間や先生とともに自分の行為と向き合う話です。私はこの本を通して、日頃仲間とどう接し、人としてどう行動すべきなのかを学びました。

読書科は、多彩な本と出会うことで、自分を鍛え、他者と向き合い、社会を見つめる時間です。授業では本の感想文を書き、仲間とシェアリングしますが、他者の感性に触れる大切な機会です。そして、文章は書くことは、自分の考えを整理し、最適な言葉で落とし込む練習なので、確実に「話す能力」も向上します。中 3 次の修了論文も、盈進で鍛えた読書力を活かし、諦めず取り組みました。読書科で、自己の可能性を無限に広げましょう。

2018 年度 高校 3 年生
高橋悠太（福山市立御幸小学校出身）
慶應義塾大学 法学部へ進学
高 3次　英検準 1 級

読書科の学びから得たもの

クラスの仲間みんなと同じ本を読む読書科。書き手のメッセージを読み取り、それぞれの感想を仲間と共有します。他者の多様な考えに触れることのできるその時間と空間は新鮮で、いつも楽しみにしていた授業です。「思いを分かち合う」という一連の過程で、「書く力」「話す力」「思考力」が自然と鍛えられました。社会で必要とされる客観性や洞察力、判断力なども身についていったのだと思います。いま振り返ると、読書科で読む本のなかで多彩な「登場人物」と出合うたび、自分を見つめ直し、生き方を学んでいたのだと気付かされます。

2018 年春　卒業
作原愛理（府中市立旭小学校出身）
広島大学 総合科学部に在籍中
高 2 次　英検 2 級

読むことは知ること
書くことは考えること

Reading is knowing　Writing is thinking

本の力 × 子どもたちの力 =∞

本には力があります。
それは本の扉を開くときの子どもたちの目の輝きで分かります。
子どもたちには力があります。
すてきな本を読めばそこからたっぷりの栄養をぐんぐん吸収します。
本の力 × 子どもたちの力 =∞
読書科の授業は、本の力と子どもたちの力が共鳴する時間です。
1992 年に再開された盈進中学校はその特色教育の 1 つに「読書科」をかかげ今年で 28 年目となりました。
本と出会い、ひとを知る――本を選びとる力は人と出会う力であり、それは自らの夢を思い描く力です。
わたしたちは「読書科」の学びを通して、生徒 1 人ひとりの夢を応援しています。

盈進中学校　読書科教員一同

あなたの夢を応援します

第5784号　発行 中國新聞　2018年(平成30年)9月22日(土)発行

夢はTDLのマーチングバンド

小林茉叶依さんの夢を福山市が支援！

福山市が中学生の夢へのチャレンジを支援する夢・未来プロジェクト2018「語ろう！夢を未来を！プレゼン大会」が8月11日、県民文化センターふくやまで開催され、網引小出身で盈進中学校2年の小林茉叶依(まとい)さん＝下安井＝ら、支援される4件の夢が決まった。

福山市制施行100周年記念事業の一環として2015年に始まった同プロジェクトは、子ども達の夢の実現に向けたチャレンジについて、専門家とのマッチングや特技を披露する場の提供などの支援を行うもの。

市の青少年・女性活躍推進課が窓口となり市内の全中学校を対象に、夢に向かってチャレンジしたいことを、個人部門およびグループ部門で募集。

今年度は、応募総数417件(作文)の内10件が1次審査を通過。プレゼン大会では、1次審査を通過した中学生7人と3グループが夢の発表を行い、小林さんら4件の支援が決まった。

小林さんの夢は『ディズニーランドでマーチングバンドとして働きたい！』で、チャレンジしたいことは『プロのサックス演奏者か、ディズニーランドで演奏している方に教えてもらいたい！』。

小林さんは、盈進中では音楽部に所属し、アルトサックスを担当。プレゼン大会では、ディズニーの曲『イッツ・ア・スモール・ウールド』を演奏した。

「ディズニーランド(TDL)やディズニーシー(TDS)のマーチングバンドのサックス奏者に直接話を聞き、一緒に演奏することが夢。訪れた人を楽しませるため、笑顔にさせるため、意識している行動なども聞きたい。『あの人、面白い』と言われる、グループの中でも目立つ存在になりたいと、笑顔でアピールしました」と語る。

「自分の世界にのめり込んで、言いたいことが言えました」と笑う。

さらに、「TDLには、6歳の時に初めて行って刺激を受け、大好きになりました。毎年、連れて行ってもらっています。小学6年の時、TDLで働いている人に興味を持った。TDLで演奏するのはどれだけ難しいことか…。でも、目立ちたがり屋で、人前に出るのも苦ではない。可能性を信じて頑張ります」と続けた。

お母さんの沙登美さんも、中央中吹奏楽部でアルトサックス、高校時代はテナーサックスを演奏。現在は、まま～ずブラスアンサンブル♪福山に所属して音楽活動を続けている。

沙登美さんは、「娘は、保育所年中から小学6年までピアノを習っていました。サックスは中学に入ってからですが、音を聞いただけで吹けるのは、たいしたものだと思います。音楽つながりなので全面的にサポートできると思います。8月26日に神辺文化会館で開催された青少年育成音楽のつどいでは、親子で同じステージに立ちました。それだけで楽しい。音楽を通じてコミュニケーションが取れます。福山市の支援の内容はまだ決まっていませんが、頑張って夢を叶えてほしいです」と目を輝かせた。

小林茉叶依さんです

中国新聞「かわら版」より一部抜粋　2018年（平成30年）9月22日（土）

2017年（平成29年）8月20日

中國新聞

福山市が応援プロジェクト
夢実現へ中学生プレゼン

最終審査 2人と2組選ぶ

福山市の中学生の夢の実現を後押しする「夢・未来プロジェクト」の支援対象者を決める最終審査が19日、同市東桜町の県民文化センターふくやまであった。中学生が夢と実現への努力を発表し、個人2人、グループ2組が支援対象に選ばれた。

343件の応募の中から一次審査を通過した個人5人とグループ5組が発表。パティシエになる夢や、空手で五輪を目指す夢をプレゼンした。

自分の夢についてプレゼンする生徒

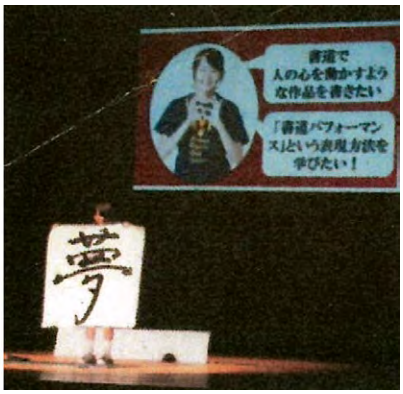
個人の部で支援対象に選ばれた東中1年の延近優さん(13)は、新生児集中治療室(NICU)で看護師をする夢に向け、職場体験をしたいと訴えた。「慕われる看護師になりたい」と話していた。

個人の部ではほかに、書道で人の心を動かしたいと語った盈進中2年の酒見知花さんが選ばれた。グループの部では、全国大会を目指す千月新体操クラブ、東日本大震災後の東北地方の復興を多くの人に伝えたいと話した銀河学院中が選ばれた。

約400人が来場。同市主催で3回目。本年度中に支援を行う。

（高本友子）

中国新聞 2017 年（平成 29 年）8 月 18 日



「読書科」の授業では毎年福山市が主催する「夢・未来プロジェクト」に挑戦しています。これは福山市が中学生の夢へのチャレンジを支援するもので、2017 年度は酒見知花さん（福山市湯田小学校出身）2018 年度は小林茉叶依さん（福山市立網引小学校出身）の夢への支援が決まりました。

書類選考ならびにプレゼンテーションで夢へのチャンスを掴んだ 2 人。「読む、書く、伝える」力を醸成する盈進「読書科」の学びは夢の実現への第 1 歩です。盈進の「読書科」はあなたの夢を応援しています。

法務大臣賞 (2013 年)

第 33 回全国中学生人権作文コンテスト（法務省・全国人権擁護委員会連合会）

＊法務省から要請があり、この作品をもとに教育映画が制作され、全国で上映されている

タイトル

NO ！と言える強い心をもつ

盈進中学校 1 年 後藤 泉稀（ごとう みずき）

〈前略〉

人と人をつなぐもの〜私の決意〜

私は小学校の時、先生に「人間が生きるために絶対に必要なもの」を教えられた。夢？希望？色々考えた。しかし先生は、「もっと大事なものだよ」と繰り返した。やっと先生の口から出てきた言葉。それはたった一字。「愛」だった。先生がこんな話をしてくれた。

「人はね、他者から愛をもらわないと生きていけないのだよ」。そうか…。私が今を生きられるのは、多くの人から愛をたくさんもらい、支えられているからなのだ。目には見えないけど、確かに愛をもらったという時は何かを感じる。ほっとしたあたかかい何かを。

そうか。金さんの部屋で、そこにいたみんなが笑顔になったのは、金さんの私たちへの愛があったからなのだろう。金さんが言っていた。「こうやって、みんなが会いに来てくれるから幸せだよ」。これが、金さんの愛だったに違いない。私も、金さんのように、たくさんの人と愛でつながる人間になりたいと思った。そのために、周りに流されず、自らの意思で NO ！と言えるようになると決意した。

外務大臣賞 (2014 年)

第 54 回 国際理解・国際協力のための全国中学生作文コンテスト（主催：外務省 他）

＊2015 年春 , 外務省の少年国連視察団としてニューヨーク国際連合本部に派遣された。

指定テーマ

東日本大震災の経験を踏まえ日本が国連で果たすべき役割

タイトル

国連は、防災・減災教育の開発を

盈進中学校 3 年　高橋 和（たかはし あい）

〈前略〉「大切なのは何よりも命」という教育だ。現在も続く宗教対立や国家間紛争の解決策としても有効ではないかと、私は思う。〈中略〉

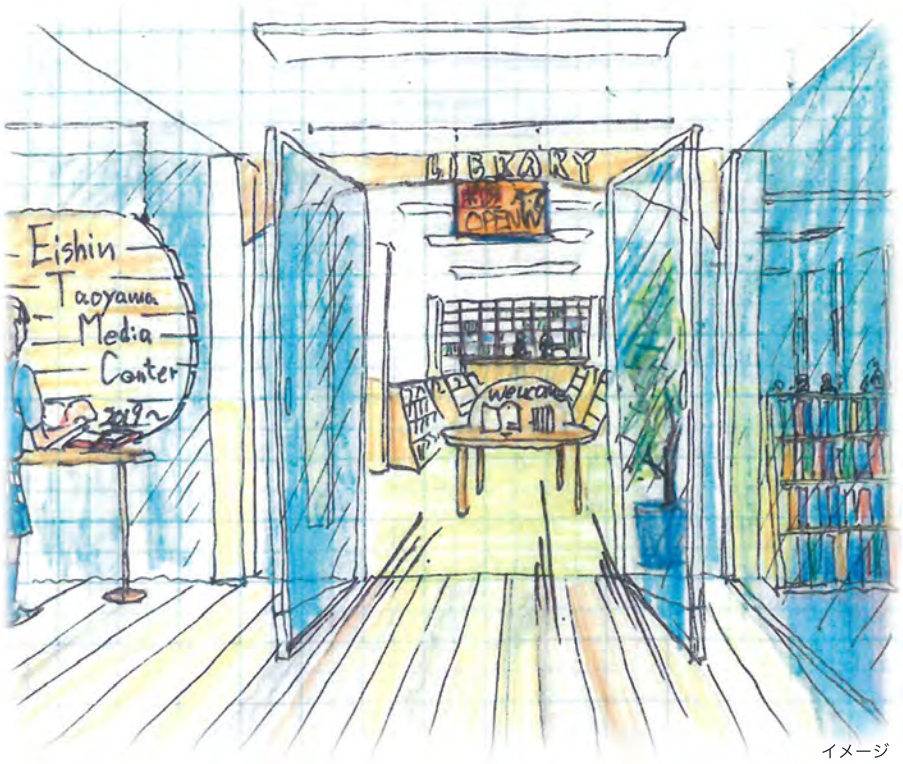
8 月 20 日、私の暮らす広島で大規模土砂災害が発生。惨状に言葉を失った。

私たちはいつ、大災害に遭遇するかわからない。だが、生きなければならない。だから、日本だけでなく、世界中の子どもたちに防災・減災の教育を授ける必要がある。子どもは地球の宝なのだ。だから、国連という世界共通の機関を通じて、それを実施すべきだ。

しかし、教育を受ける権利さえ奪われている国があることも忘れてはならない。教育の重要性を訴え、私と同じ年で銃撃されたマララ・ユスフザイさん。彼女が暮らすパキスタンの識字率は約 60%。学校にすら行けない子どもたちが世界には大勢いる。貧困という負の連鎖は、教育が不十分な現実がある限り、断ち切ることができない。貧困が暴力を生み、暴力が貧困を再生産する。マララさんの国連での訴えは、私の考えと合致するはずだ。　〈後略〉

新しい盈進の図書館

地域に愛され 地域と共に
こころを育み 出合いと学びを創出する
知の集積地 知の発信地



イメージ

仲間と共に、自分で考え、自分で悩み、どうにかして解決策を見いだし、たくましく生きていく。自分を大切にして、他者の痛みにそっと寄り添える。

そんな「ひと」を育む教育を実践し続けるために、「読書科」はなくてはならない教科です。止まぬ紛争、格差社会、AI の時代･･･この予測できない世界、社会のなかで、本と読書が好きで、少し立ち止まって、時に後ろを振り向いて、日常的に無理なく活字に親しむ時間と空間が、ますます大切になると、私たちは考えています。

本（読書）は、「豊かに、やさしく、しなやかに生きる」ための感性を育み鍛えるための養分を与え続ける母体のようなものだからです。

※2019 年春、盈進中学高等学校は新校舎が完成し、さらなる教育の変更を図ります。「読書科」の学びを生かした、新図書館の建築にもご期待ください！

「夢と希望」あふれる新校舎完成

２１世紀のグローバル時代へのあらたなる挑戦

学校法人 盈進学園　盈進中学高等学校
Since 1904
720-8504 広島県福山市千田町千田487-4　T:084-955-2333　F:084-955-4423
www.eishin.ed.jp

表紙絵：2018 年度　高校３年生　新貝彩菜